

**333. 地域在住高齢者の転倒および複数回転倒に影響を及ぼす身体的要因の分析的研究(加齢・性差, 一般口演, 第63回日本体力医学会大会)**

著者	清野 諭, 藪下 典子, 金 美芝, 根本 みゆき, 奥野 純子, 大藏 倫博, 田中 喜代次
雑誌名	体力科学
巻	57
号	6
ページ	799
発行年	2008-12-01
権利	日本体力医学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00125723">http://hdl.handle.net/2241/00125723</a>

### 333. 地域在住高齢者の転倒および複数回転倒に影響を及ぼす身体的要因の分析的研究

○清野 諭<sup>1</sup>、藪下 典子<sup>2</sup>、金 美芝<sup>2</sup>、根本 みゆき<sup>2</sup>、  
奥野 純子<sup>2</sup>、大藏 倫博<sup>2</sup>、田中 喜代次<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>株式会社 THF、<sup>2</sup>筑波大学大学院 人間総合科学研究科)

【背景】近年、地域においても転倒予防の取り組みが重要視されるようになり、早期に転倒リスクの高い高齢者をスクリーニングし、速やかに転倒予防活動を展開するための対策が希求されている。地域で簡便に聴取可能な情報から転倒リスクの評価ができれば、地域を基盤とした高齢者の転倒予防対策に資することができるという意味で、大きな意義がある。【目的】そこで本研究は、73.7±5.9歳の地域在住高齢者483名（65－92歳、男性138名、女性345名）を対象に、地域で比較的簡便に把握できる情報に基づき、転倒および複数回転倒に影響を及ぼす身体的要因を検討した。【方法】身体的特徴（7項目）、過去1年間の既往歴（9項目）、自己報告による移動能力障害（3項目）、体力（10項目）、生活機能など計32項目を調査した。これらの変数を男女別に1.非転倒者と転倒者、および2.転倒回数が1回以下の者と複数回転倒者とでそれぞれ比較した。有意差のみられた項目を独立変数とし、転倒の有無および複数回転倒の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を施した。【結果】過去1年間の転倒率は、男性で24.6%、女性で26.7%であった。また、過去1年間の複数回転倒率は、男性で14.5%、女性で12.5%であった。転倒者と非転倒者との間において、男性で18項目、女性で14項目に有意差がみられた。転倒回数が1回以下の者と複数回転倒者との間では、男性で18項目、女性で19項目に有意差がみられた。有意差のみられた項目を独立変数としたロジスティック回帰分析の結果、転倒に影響を及ぼす要因として、階段昇段動作の困難性（Odds ratio (OR): 2.15, 95% Confidence Intervals (CI): 1.29－3.58）、糖尿病（OR: 2.11, 95% CI: 1.05－4.25）、膝関節痛（OR: 1.77, 95% CI: 1.09－2.87）、タンデムバランス（OR: 0.97, 95% CI: 0.94－0.99）、タンデムウォーク（OR: 1.05, 95% CI: 1.01－1.11）の5項目が採択された。また、複数回転倒に影響を及ぼす要因として、階段昇段動作の困難性（OR: 7.05, 95% CI: 3.22－15.46）、糖尿病（OR: 2.93, 95% CI: 1.29－6.67）、タンデムウォーク（OR: 1.08, 95% CI: 1.03－1.14）、身体機能（SF-36）（OR: 1.02, 95% CI: 1.00－1.04）の4項目が採択された。【結論】以上の結果より、地域で比較的簡便に把握できる情報から転倒リスクを評価できる可能性が示された。今後、転倒リスク項目と実際の転倒の間の因果関係を明らかにするために、縦断的検討が必要である。

#### Key Word

高齢者 転倒 複数回転倒